

欽定四庫全書

七篇

79.7

利9
3869
34



欽定四庫全書

七卷

利 9
3869
34

特
9
3869
34

大正七年五月廿一日
室井平藏氏

歌羅衣七篇序

和歌能貴族を友とす家と論
其き風流忠力競る面を
其意即智能早き業を其分の
縁香立言もわく事其撰る
投句を採念心又ノ切小待り
其能未練成催促しり

拙き墨扇ぬ海と附の寄せ
 之の八竿さき押しもおさきぬ諸
 君子の集吟先此秋まのり
 哉家ぬ記し言や秋来まのりぬ
 紙と待との生

天保十二
 九月

東都丹頂齋一祥



初巻の夜七篇

折句歌 子サツ

初巻の夜七篇
 初巻の夜七篇
 仕掛と掃除も長山東の紙
 七言人乃掃除も長山東の紙
 七百金身重も法ものりて度
 右此先法ものりて度
 境幸くし酒あまのり子の意ッハ

沙州四丁 旭二
 本町三 金星
 招木 道好
 沙州四丁 秀八
 深川 丸菱
 龜江 智水
 日玉 女七

大里の暮枝散るる所く連る水
 仕舞ハ朔夜頃へく續く月
 書写れ意淋しと空に若く
 仕るの暮サと散る心く意散
 芝居の相結さるる心連る
 空に散るるれく心散るる
 名後散枝散る折りも折る
 ちり散るるれく心散るる
 散るれりおけり身散るの他り

形枝本所
 本報二
 一 泉
 本報
 九 鳥
 中ハ
 泉 工
 本報
 路 蝶
 本報
 山
 本報
 一 長
 本報
 吟 芝 樓

鶴白二下けり身ととくと書
 遠く子の掉より針をく書
 遠く身

日 八 二

ちちく 暮る 眼も涙へ夜半
 鈴も座を名月よりぬけ
 空もも 暮る 仕舞ハ秋意
 外へへへお先キ 邪へはあ連
 けり 枝更目散るる坊
 箱根の掛の下のりへへ

堀口下
 松 鶴
 本報
 枝 辰
 土バ
 系 竹
 本報
 徳 利
 本報
 松 花
 赤 坂
 徳 利
 赤 坂
 花 丸
 新 川
 河 耕

新振も少く高の福も過水
計も儘さうと目覺し不庭
さう草苞より志ある者の

冠歌 入替

入替り心お好く妻に此物も
入替り心上下々市のはや
入替り心故屋と巨魁の別下
入替り心御抱合らぬに手
入替り玉も月鏡のさうか歌

新水
如鶴
朱窓

中ハシ
安茂

比ノ端
比鶴

赤ハシ
龜山

比ノ端
中根

上員
奇玉

入替り青河しし此先之様

刀 増

増塩をとり凡用不盡と封
増し跡も田舟海一の運ひ
増し〜燃ふ子越藤せ出ふ本
増し〜飛入之枚揚を著て留

休田
亀甲

土ハシ
来賀

本派に
一刀

比ノ端
藤房

比ノ端
五束

折込歌 奉板

奉奉も深氏桐壺乃板表紙
櫛も本甲より一枚の板改ら

比ノ端
盃洗
一賀

二三本お板付くも為法く戸
豆板く是紙体免河推り本
幸島の角紙板乃圓ひ生

中ハシ
一 鶴

新水

榮枝

五字歌 養也

深之場

福富

中ハシ

里久

新川

龜年

夕キ

豆つるふと紙砂糖を罽く来
旅乃去産と内ても物外ら
大仕掛々の重園を移る
坊と推り子と抱て抱く
日 何やういふ

うねつて居るうーろく運入り

本張四

二刀

内て垂して産教へ出さ移へ

了乃

園入

手拭罷も引つて移さく

奇玉

壁を法河と垂くふ引紙

中ハシ

樹月

養也 兄さん

是那乃氣く入り

玉便

折る歌 ナカハ

嘗て法系紙を地打目名の子

湯シマ

陀良丸

長板よ置も賃之高く走り紙

金星

撫舟の髪も幸出乃子交度
並ふ生るあもか参りの場前携
並らせらるる信見世妻の目も配り
夏焼くも望し嫁結ふ母の髪
名をを門し一漢中を結妻の髪
あまれば青よりいと妻初良男ふん

阿ノキ

伴源 兵士 信良丸 亀甲 吟多 盃洗 酒利 西條

上うの月名月あ河つふ舟
あまちちりまはと沙丘を望敬
足元ト妻乃取く子と鏡
足て小物袋をのけるは持極
按戸の下子と乳をのんと妻
姉さんの皮切りを笑ふ子

冠ヶ野 月

舟 一泉
舟 免抱
沙 池鶴
沙 田張
泉 泉工
丸 丸煮
亀 亀年
奇 奇玉

月もろはけり 洋借と幸いあり
月の光温多暢の日記も名所の句
月影ひ赤さんと湯へ二七夜

一長
榮枝
旭二

月 柏子

柏子本も口ッ裏表丹羽の門
松子ぬけも流も石の子も流も

智水
五束

折込歌 玉音

音も秋智も玉屋の足袋作
備前屋の玉も折のそは折も折

小舟丁
枕部
湯系

見世出前折入玉屋此流の音

音玉

五字歌 あらま

メ冬取とくふ流し我防と
子ふ阿ま流藩志へくまみ
口取りの筆も折業とま地
流ひくく流く万流を介し

安茂
枝居
樹月
松急

月 五字もす好

旦那の足越承知く踏み
流雁とものをすつり後り

里久
口山

市近産物より法りて也
冠り月文く肌を

中服

芋も衣加り文

玉冠

折句歌 八八八

帯の柄をくろくはく記も印は時
這ふも紀子く智恵付、夏産し
流り子の半日も藤ぬ糸の糸
帰り越舟一振り白く袴 腰
若狭のよ舟の名もく一舟の舟人

沈鶴 泉工 德利 奇玉 丸葱

ちのとぬ糸拭く子れ乞り書
端折る裾階子小訓をんをく子
ちとくく糸鼻紙口くく記水
端折って甚一二くぬきせる
墨も二枚這ふ子可巻く知はに
履物をぬき拭くせく巾する子
肌をくハ懐隠れけく色際
端折る度羽織短く子ゆり
拂く子ハいとお控りもくん子

記良丸 深川左衛門
且雪 深川左衛門
一糸
藤坊危 深川左衛門
佐雪 赤坂
玉冠 赤坂
徳利
中服

半毛お嘆息と云ふて氣も法らぬ妻
細めく子をたつてたつちたつちをた

日 トト

身におへ巨魁座く長孫守
雨より田圃を飛ぶも新解
時く口乃尖うふ徳さ物
鶴踏くそのまとい酒も文々
古是ッ清きんともろ一袋
留められと子と當安此代

八七川丁

瓶子

一長

盃洗

徳利

五束

新水

地籠丸

深位

深川え坊

戸流りいそくも幸喜ゆやく所

冠 歌 童

重の形更々々吾々の付々元氣
きぬる年も切積してつる書柳
重の幕の内割と男小童も徳めて

赤坂

乙朝

酒系

蝶塔

深川え坊

日 あつさり

あつさり〜笑ひ色〜吹く好膏
あつさりと子小公粉も漏書ッ子
あつさり帯端と子の宴合ひ傘

亀甲

福馬

正泉

深川え坊

深

あつらうと水紅粉粧口(括)の先
あつらう落し突く吹く雲流

折込歌 外味

三味線うさうさう調子よ和気柔
薄釈を和気百味の善く和所
三味線うさうの志ん猫も和気

五字歌 詠あり

三日小上げど若物の吐いた
園持乃足らみどい

雲林
九香

玉賀
石耕
口山

安茂
松茶

美し〜所へ欠け

口・もたふき

髪を結つ〜若女(りき)ん
招き乃母も二人りきりせ
洗濯を〜〜泥水をそぎ
針仕り〜子仕りも若せ
冠り〜形も若女

塩に漸るのこ

若玉

亀年

若女

若士

若女

玉住

折白歌 カカカ

髪も骨も〜顔見せ人飾り
掛ヶ針よ加りたカラを返し纏
か〜足並厠へ為れ雅子恒花
可也イ院法聚り〜顔も嫁
ゆり飾り子お古産と可也イ子
所傳あへ〜空日知も雅子院
借りた下結傘礼ぬよ西氏書
垣〜壁を枯木と色も鳥爪
婿哉せり〜今内もゆりも

徳利 新水 松花 根子 福百 考^田 泉工 九鳥 豊次

園イ梅ヶ枝茂蒼葉一る目
枯野これ白風〜わ〜法〜新新
河原ら〜ま〜ゆ〜ぬ船の坊て酒
河岸ゆり合胸の肩〜掛ヶる鴨

日 夕夕

杉玉柄扱〜密〜法〜子〜糖
多〜つ〜と〜赤〜を〜是〜は〜若〜妻〜の〜河
抱っ子い〜と〜と〜だ〜を〜踏〜む〜泥
抱キ〜登〜へ〜〜子〜哉〜欺〜と〜乳〜葉〜

安枝 比鶴 鷗^{向ヶ是} 五音^{セト柄丁カシ}

あそ屋々来々臺前一 あり
足袋つより清社権よしたる子
言々態子を田舎にむ中

路標
志孝
燦燦

冠り歌 朝

朝朝ひ誘引合ふ子の吐く隣り
朝市の古きうそんだ車と付人
朝帰り母の路を切ら拍子幕
朝の顔ごんか屏風の隣り同士

禿地
清系
三燦
洗濯

白あつらふり

あつらふりと純あつらふりも梅子色
あつらふりおんを顔そむく人えあつ
あつらふりと芽て一ひまの海家のあけ
あつらふりとねむる座の子もかりはら
あつらふりと寄て密しもあつらふり
あつらふり借りて小用たをあつらふりの下結
あつらふりも洗あつらふりもあつらふり
あつらふり葉漬はせらへ又あつらふり

春志
亀甲
枇杷
雲子
正象
一象
夢父
五木

折込歌 待歌

色む良待乳流しふ粒牙色し
已待乃お卵毎とと畏るれお
来と待人トふ家も也る歌の色

河耕
藤坊
江川
海糸

五字歌 極円

向ふ乃顔をも面てのそふ
怪しつりく母がおころり
淋しころふと見けんう泊り
幸也乃抱りーまた色
門松の兎城城ら芳

重星
新玉
安士
作里
忌入

旭の枝々雀りーはる也記

雀意

四 毎つもの

這今も戸を介くらたてら色
あれ和者くら生奥い中だ
隔乃あれ襖を介ー
足寄りーちのそやろふ
酉の古産も燐石に結ん
夕々 柳へそぶかー

安茂
夕キ
玉賀
奇玉
亀彦
玉住

是とぬ場の子

折句歌 ヲツツ

次を本や川水溜り戸を交て花
連き近附さし紙一の裏は
つれと多ぬ飛と一度とつめりも
淡と息灯燈年いゝ病を膝
常隠は凡三曲くの裏賣めて
凡之立寄踏おと産乃色と皮
化り新大勢つみ世もも妻更共
勤よちい法りりよ心よ水次葉碗

糸竹
一鶴
子来
丸友
平麓
二刀
妻志
藤房

月亭って一ツ身をははるり母
序ううううおこれと後の子
はあうれしてつと山流しの初これ身
包んく籠の子年去妻有盲
つ能りとも度附無ふ子も對の親
抗む猿妻も水場り凡之
法むりもむつそ本店へ妻は始
若く後一妻ら小縁つつおん
積り重ふとわねつ一と

一糸
有竹
木丸
睡蝶
民子
龜海
如水
一泉

外作田

口 口 口 口

寤 多うをねも花う一夜の用
身心と志ん移とと心別床
喰切る来り口粉粉の海
為芋乃世言ちを格よ届く毛
くやーさされよ喰割裂く毎
競る多事ある格の中何事
々々仕舞り入袖口とをのちり
く何りとや紙くを格く相

紫葱

素葱

其葱

蝶葱

菱葱

徳利

如石

中眼

魚目

上毛相せ

外林田

一刀

菱目

松古老

瓢子

中ハシ

西ノホ

冠り歌 行

后乃の猪牙小ゆらん心落世
后子小子妻接り身七次々
后足子傳りた羊飯ら恵一の旨
后寐癖カが来るとあやれ

金星

亀甲

雲子

松花

片伎りくも字らく偏く連一毎
片腕くもく氣地よりも肩入して
片側くも解やもい織子の夢
片寄をくか登鳴ふ日の夢か
片着きりも上げ秋富前
片子採河岸波もももも
片寄せく藤の穂もももも
片物折りもももももも
片歌もももももも

盃洗
徳利
春曉
五来
研耕
紫枝
金星
覽波
沈鷗

白 物 提

物くさけく子殿は下結も替も
物くさけく子もももも
物くさけく子の男くと刃る小太
物くさけく子もももももも
物く提ふもももももも
物く提ふもももももも
物く提ふもももももも
物く提ふもももももも

泉工
和光
詠蝶
吟多様
嘉承
自笑
研耕
存世

七世

折句歌 花冠

花冠
系乃よりのちる花冠の花車をかきて
花の香き踏むは中此花冠
お石の乃花冠は子もありの
新道は梅子石も花冠は
五字歌 脊上げ
おトイや心の田舎を御さき

花冠
桃色
奇玉
吾扇
池鶴
石耕
亀年

笑向きこれ花冠はあつ張り
茶七瓶一いつたの入り色
花冠乃封城切らぬ

日あつたの

別海と花を世つと仕舞
おらひ〜〜〜舟一帆をけ
明〜あつ〜空海〜吾
脊上げメらぬ通ひら

怪小付々やう

毎十
安茂
形丸
智水
三宝
奇玉
玉伝

折句歌 セカッ

さうりあ影へ子籠をつて轆
是些年月日何ぞのあまのつゆ氣
老るゝ氣倍々女離れあまのつゆ
脊の各々をかへてあまのつゆ物
落くさるゝゆゆ梅足のあま柳
後立^テよかりり籠れもあまの袖
うかり経夜流るゝあまのつゆ
打明^ケて流るゝあまのつゆ

一 堀
重星
本不 志麓
一 泉
其 岸
和 光
智 和
舟 堀 堀 柳

卯のむやまぬ差の子に凡延人
落つるゝと影倍々つれぬつれぬ
外内各各門仲とともあまのつゆ

月 アハ

拙ふり望む床歌屋くは
あゝゝた産よ流るゝ小揚枝
流るゝあまのつゆ春も引^ケるさき
あんがよよ坊とりたりさき
あんがよよ坊とりたりさき
あんがよよ坊とりたりさき

松花
子来
盃洗
徳利
舟 堀 兔 地
龜 甲
中 堀 熟 子
松 寿

あけ子の名地の海方あり
乃乃其れに物々の所
一のちこきみれ述べて立つ事

沙燦
柯耕
泉工

冠り歌 丸

丸留も娘さうく先々の世其は流る
丸と角取落等も一ッ
丸り煙の天井へかゝるる月
丸くくく為こ子に物口も骨折

休田
白山
サ好
金多
英壽
池階

白 丸見え

取くくくかやと和と玉縁内端
取くくくかやと和と玉縁内端
取くくくかやと和と玉縁内端
取くくくかやと和と玉縁内端
取くくくかやと和と玉縁内端

柯科
新水
英志
咳之
奇玉

折込歌 出目

むりくと絶の目娘の出も通す
歩の二歩目哉人先一歩居の妻
道津瑞砂のせり出よけさぬ目

桃都
奇玉
英志

髪出ると髪新居なる目入の目
目の字にゆきある筆乃二心刻り
連して出ると目入一一目入の字

一踏
彩水
夢又

五字歌 二ノ目

鳥帽子にの海も元々いふは
傘紙借りてくも返すはあは
衣のさる衣とは掛をを袖さる
向のく越はあはく小使仕さる

決将
安哉
龜年
疾士

口是てより

年一かかんと喜柳を切らせ
焼菓子をつ坊又あてうい
入替く子曲物をうけけり
折込 此所出きりてあは

中ハシ
紫嵐
春乐
福属

んくぬ目ま形り

玉住

折白歌 コカツ

紫屋細うに氣紙付てきひ糠
好む新紙をのくたあめの風
さるはあはの折白を比懸る

明子
葛洞
路標
春志

折白

はるる々々金糸並ひしと妻と糸
極長かんく一雷りと妻と糸
五徳のやうに流るる浦と遠き日
子の足長く出を結く時の梳
子の流るる我々の似顔妻と糸
苦むむと流るる極込の月流
子供のあつらふ妻と糸
此心と妻と糸

日 一 口

口 一 舟
一 舟

平 禁

覽 波

吐 多 様

枝 店

泉 工

花 禁

引くもさやあり伏せ玉の場不
引くもさやあり伏せ玉の場不
引くもさやあり伏せ玉の場不
引くもさやあり伏せ玉の場不
引くもさやあり伏せ玉の場不

冠 一 跌 川

柯 耕

如 好

浪 心

五 来

一 泉

決 碑

龜 甲

日 一 字

七 年

浮世書く猫の介懐子口も乞
浮く病も氣和藤されぬほふ極探
浮きれ出さるゝあのをさも引けり

浮糸
重香
信系

折込紙 間込

少いふもるうとれまんと込云急屋
客の込云る毎に別の葉れ出花
極込のふれるふ月の椽縁一
具那の外の目と附込人てふも物屋
まきれあつてもとるれ込云夏芝居

池鶴
如山
徳利
真一
奇玉

五字歌 ぶらりもの

四つ切暢所へ棄ら色
衣紋やうく男仕きだ
人形の首に清香に掛り
七つ下りとさしきくもた

何耕
三宅
兵士
雀鬼

日 幸抱

六もくもきても糠ら出ぬ
校為のうらと通いさきみ
病りだとも石のやうさ

安茂
重星
奇玉

沁^トく 藤安こ 故きうと 信海
あんがう 長刀系 藤乃

あゝ 成踏んまへ

折句歌 カハ子

紙て 扇尾系と 糸ぬる 根よ 小纏
月 葉つ 蓮の 根 根つ の 舟 子 踏
ゆ け ぎ ち ね じ 半 成 の け 二 折
成 の 葉 葉 針 よ ぬ り へ 舟 出 成
駕 ち ん じ 糸 糸 ね ち 高 い 連 の 味

亀年

玉任

龜年

凡意

桃也

葛洞

徳利

葉つ 心 籠よ 干 物 屋 の 舟 出 人 連

女士

丁の 舟 計も けう 水 舟 冬 交 交

泉工

合 解 あり 端 に 生 葉 丸 古 山 石

一秀

流 台 管 系 志 人 と 藤 も 又 う て 籍

名人

冥 己 よ 葉 系 枝 ひ ち 蓮 葉 の 子

如水

帰 舟 せ ち ぬ 又 志 う 舟 葉 枝

通之

日 アセツ

舟 己 を 藤 氏 志 の き 結 意 解
浮 舟 く 葉 子 又 ぎ ぐ 指 の 後

舟外

沈鶴

胡出乃猪牙よひやう秋風
集免青も引もさされ酒

阿耕
英志

冠リ歌 其

其籛せんでり能くたつて子に子物
其田の紐より大猪のよひより
其を信あり放蕩と引詰めて
其平と後ろ紙よひの纏り纏

言洗
一秀
出人
亀甲

日 吟

吟ひ返を函次行馬も梅並して

花籠

吟ひ井戸の釣瓶西風と津舎を
吟ひかゝるれど門附けの一は谷

一泉
重高

折込歌 氣子

雲あま子の音も替り絵何なま
猪肩も子あり松蔭の字も外
母の氣もあまねく一平く娘の子

函蝶
一無
奇玉

お字歌 又れん

雲乃らうら紙返しよりより
そ形まかゝるこ生肌ういこ心

浪女
安茂

お月ひ切つてつぎはさきのそ
下りの多心羽織を掛うてん

奇玉
其巻

口 晴ね

私しりしと夕子りむちれ

是入

をちりし夕月も行く旅

梅月

海はれ月張うつらう旅

其巻

アヒ 秋月しり改屋

泣きうら子小沈

玉住

折白秋 ムカイ

同じく若替へおの子結今か次き

沈鶴

六つの綾唐紙の紙よ一度の巻

五丁糸

娘根し清りし娘も云いぬき

睡蝶

お侍子も唐ふ七つの紙ひの子

玉交

娘帯買せし紙けり板をさみ

尚月

又事る水海もさし作すいさし

徳利

首の塩か減鶴もさしあをさし

兵士

又唐も長く酔う子に糸織入

泉工

向ふ海唐の清静のしりし

一泉

11110

修多りの電りし自入一把新
家小巨魁かどけぬ母子まれ子
まアアの可きさかを産戴子
系何氏作買ひ初る大おもち也

日 ハハ

山嵐
白子
灸灸
盃洗
安哉

あふら小妻云は帯下一巻
按ゆるハこ毛か母の胎前
穴り唯ことばさく子れ産く
腮く作ら神官放されぬ摸

本不

巴紅
清彩
喜楽
奇玉

冠り類 浅

海島は舟くまき柳の岸筋重
海漬も且形場あく葉を配り
海漬もえせしと色は暖簾切
海漬け糸前垂もく作き市

日 深

海の中志あふ風を深く目上仕打
深板あ東流ひるに糸引く眼
海いけれとや成巨魁をれ晩

相形岩
一英
一鶴
巴
角

七十四

歩く冠つこも拭も店乃よ之
深入り小終積習古新も深きあら
深きへも海も居續けも雪も此物

松老
阿房
玉賀

折込歌 時引

氣成汲んて將く産と引産一産
と物とも水引きた望ぬん時子
免いせんを引くも将く母扱苗
呼く清引く釣餌も将くと子

喜山
竹仙
石耕
亀甲
花菟

五字歌 らんぶく

新らしいお蘇の来あひ
舞乃乃あきと終守りと踏こ
とと心廊下もありとまきせ
押さへ人も筋遠ひよ花つり
師を去る思ん水をもあつてけ
師道の為ちん寺子屋物め
美 塚の穴 越 見 付 け
外カの産交ハ壳 仕 舞 だ

銀花
一 英
向々思 松 雨
非田 柳
出草 芳 山
かろし 三 山
亀年
吟多楼

月 扇けむ

先勝日の星綫掃り出非田小高

板又垂しく市を何と脊負せ 玉賀

膚を穿き安んじらる向う足亀童

孝行酒屋も藤ふし向う足松里

とそ宵の夜廿八吹の切さうど 三宝

らぎ仲の所よ 玉任

巻つて下りた 玉任

折句歌ニサツ

恙者そ細み酒のまど屋敷席 松雲

新居の酒乃通ひも積る雪 葛洞

有後あつさく今神をつたら 睡蝶

彩子よ来く酒身ひ子よ泣き甚非田極虎

神よ挨拶逃けく笑く使ひの子 路蝶

支度しく毎の方角の裏曆 一泉

晒露く毒さくぬも座は連送 徳利

茶を二の酒身を二茶を二裏を二危 安茂

神よ挨拶かきさの裏へ世の坐候下季月

の縄いさむ草羽織連して市 葛山

ちまきをばり座敷もまねぬ酒肴の
 実ふつと床の落合のたぬ痛の子
 朱衣のさし書きさしむらさき色
 ちりりたる小皿あちこちの裏に
 夜通の聲も丸うねる連の足
 縮む指先さかき年へはさるる
 知内室の屋サも年が積る毎
 半田稻荷のうさぎと明く夏
 己 紅
 一 長
 朱 雅
 雲 軒
 鹿 遊
 尚 風
 東 喬
 新 歌

箱持祝く舞湯のり口
 羽折も樹りや水門松
 走り家々餅配舟宿
 子夢の未々々々々々々々々々
 ちやん生海扇も松の松好
 羽織の紐を以て解く茶屋
 羽折を穿く子もやると三日月
 毎引窓々々家折屋おあふ
 墨紙白くくく喰切くは
 己 紅
 一 長
 朱 雅
 雲 軒
 鹿 遊
 尚 風
 東 喬
 新 歌

カヒカ

花 藤
 三 藤
 吟 多 橘
 衆 衆
 魚 交
 亀 年
 丸 煮

為 二
 平 内
 智 水
 春 成
 池 鶴
 拍 枝
 一 英
 今 朔

角海老の郷は浮上りかざり付
 亦ぬ金引掛り下結をかくる言
 炯よ妻引籠着お冠を灰
 切志の子居く座考後梅の春

冠り 能

能く透紅を以て色いよ又梅と酒
 能く仕舞止形陽氣に志方の玉
 能く青ハ草と青草とて粋心は
 能く運入る心とて好く又此菓子

外 日
 今 朔

能身之業内娘も東下結 如 氷

日入

今更とけり果地智と子のどけり
 今更側より陰の陽もたごころ大
 今更も揃せも娘あそく母の床
 今更さうと物柔山椒もまめ母
 今更れも無とそそく葉屋の附
 今更も解花とあそりの連
 今更も結雲也と雲の法地所
 一 春 志
 一 協
 泉 二
 花 魁
 玉 交
 小 言
 八 方

折込野行下

掛下下馬のゆく先を踏る巨魁
 お智のけ子のゆあそく下子若
 天とて結伏せゆ花の下と物
 是とゆけぬと物と結の又好り

非 聖 洗
日 歌 殊
 柳 居
 牛 仙

五字歌 大たん

昔馬所々里子成あつり
 懐した帯成は形よめさせ
 戸をよめ急く様よめく

松 里
 毎 士
 五 未

きつて合も十段あぶこ
と那よかくまを裸多りだ
表門を和るが戸を

五音
表楽
一刀

曰 倭よつこ

朝う割向板を脊負ひひし
明て世つと隣より破られ
扱へ喰ひを後がぬく世
櫛足の刺刀が切色糸人
ゆきもハ分よ替く仕立

奇玉
三宝
處向十段居
研耕
柳

曰 とんだら

園ひと並しそ出らうまより
路らけらりと雷の音ぞ
下道の氣をうと替り宝丁割り
折込地所新瓦

二刀
法茶
多産

鯨の表ふ赤下道

玉住

かゝる七篇終

後篇迄の出板

